

博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者 陶山大一郎

学位請求論文 見ることの詩学—ボードレーン『小散文詩』における視覚の問題

審査委員（主査）西永良成

（副査）鈴木啓二

西谷修

和田忠彦

松浦寿夫

《審査の結果》

本論文はフランス19世紀の詩人ボードレーンの散文詩『パリの憂鬱』のテキストを〈見る〉行為および眼差しの様態の観点から詳細に分析・読解することで『悪の華』以後の後期の詩的・美的考察とも通底する特質を抽出し、これを解釈・記述することを目的とした論文である。テキスト分析の緻密さ、先行研究並びに参考文献の徹底した渉猟、作品の美学・思想的解釈の繊細な独創性などにおいて、この当初の目的はほぼ達成されていることが確認されたゆえに、審査委員会は論文審査及び最終審査の質疑応答のいずれにおいても申請者の学識と研究者としての力量を高く評価し、全員一致で申請者に博士（学術）の学位を授与することに意見の一致を見た。

《論文の概要》

陶山氏のまことに精緻きわまる論文は、ボードレーンにおける視覚表現の重要性の観点から『小散文詩』のなかから典型的なテキストを選び、その文体分析を徹底的に行うことを出発点とし、そこに特徴的に見られる主題系・問題系を現代哲学、文芸理論、言語学、美術史に関する深く広範な知見を駆使しつつ、

ボードレールの詩学の射程を確定し、その現代的な意味さえも見極めようと試みるものであるが、四部構成のこの論文の内容は以下のような概略のものである。

「序」で論文全体の見取り図と研究対象および研究方法の提示がなされたあと、まず第一章「タブローとしての詩」は、詩作行為を語る一種のメタポエムと見なしうる詩篇「窓」を他者のイメージを枠づけし、それを一枚のタブローのごとく鑑賞する行為自体に焦点をあてる形で読解を進める手続きを着実に踏み、しかるのちにスタロバンスキー、ジンメル、フィンクらの所見を応用しつつ、この詩にはすでに後期ボードレールの美学に特有の、イメージの様相的な拡張化・喚起作用という命題と鑑賞者としての詩人の不安定な位置づけという危機的な事態が見られることを確認する。

つづく第二章「眼差しの恣意、諸芸術の交錯」は、近代都市パリの一光景を対象とする詩篇「貧しい者たちの眼」を眼差しの恣意性、それゆえの視覚的コミュニケーションの亀裂を語るものとして分析し、これをボードレールの美術批評（『サロン』『現代生活の画家』他）の特質、なかんずく諸芸術の比較・差異化、および視覚的コミュニケーションの危機がただ詩の語り手のみならず、これを読む読者にも影響することになる事態の意識と結びつける。第一章につづくこの第二章によって、ボードレールの散文詩における視覚性という全体テーマの特徴的な核が記述される。そして、このあとの二章は視覚性に付随するいくつかの副次的主題の考察に論が移行する。

第三章「表象行為の視覚的寓話」では、視覚と暴力の関連を扱った「描きたい欲望」「情婦たちの肖像」「粋な射撃家」の三篇の詩が取り上げられ、これらいずれの作品にも上演化される〈見る者＝見られる者〉の不均衡な関係がつねにある種の暴力性を孕むものであること、そしてこの暴力性がどちらかの死に至る結果になっていること、したがって〈見る〉行為には死の契機になっていることなどが見届けられる。そしてこのような象徴的な〈死〉が後期ボードレールの美術批評に見られる記憶と表象をめぐる考察と関連づけうることが論証されている。

第四章「傍観者とその語り」では、〈子供〉という形象を扱った「貧しい者の玩具」「菓子」「天職」の三篇が扱われ、いずれにおいても語り手が中立的な傍観者として振る舞うにもかかわらず、テキストの視覚的提示のレベルでは語り手から読者への感情の贈与がおこなわれること、そしてこの感情的な贈与とい

う主題系が観察することと語ることとの関連において、第一章の問題系と円環的に回帰していくことが指摘される。

最後の「結び」では以上の四章で提示・論証されたボードレー尔的詩学の特質であるところの、言語によって形成されたテキストにおける〈見る〉経験の多層性と不確定性の美的・詩学的意味の考察がなされる。この考察はボードレー尔的詩的自画像とも言うべき「老いたる大道芸人」の読解というかたちで、これまで取り出された主題系・問題系の総括と例証を遂行するものでもある。そしてここに見られる近代社会における、ある種の諦観を滲ませた詩の悲劇的存在証明こそがボードレー尔的詩学の核をなすのであり、これは現代の商品消費社会における詩、詩人の不幸な状況を先駆的に暗示するものでさえあると結ばれる。

以上のような概略だけでは陶山論文の美質を十全に伝ええないが、審査員たちはその達成をつぎの点できわめて肯定的に評価した。

- ・ 「現代性」を体現する詩人としてすでにあらゆる角度から論じられてボードレー尔について、まったく新しい観点を打ち出すのは至難の業だが、この論者はとりわけ「タブロー」としての性格をもつ散文詩に着目し、そこに語り出されている情景とその構成から、作品と作品を支える「視覚的關係」を重層的に読み解くことで、ボードレー尔的散文詩における視覚とポエジーの成り立ちの關係を分析・考察し、またベンヤミン、スタロビンスキーをはじめとする夥しい先行研究をふまえ、ときに先行研究の成果を一步進めることに成功している。また、全体的に見て、きわめて質の高い議論が緊張感を維持したまま展開されていることは特筆に値する。
- ・ 個別の議論としては、視覚をめぐる語彙の組織化の様態を考察するうえで、ボードレー尔の美術批評並びにいくつかの近代絵画の作品の分析を参照しつつ、詩作品の構成原理を抽出する点が本論文のもっともすぐれた成果である。
- ・ マイケル・フリードに依拠して、フランス近代絵画に頻繁に現れる視線の無關係性という特質への言及は、視線の劇として組織されることの多いボードレー尔的散文詩理解において、きわめて有効な経路となりえている。
- ・ 論文に引用された詩、散文はすべて著者によって翻訳されているが、その訳文はきわめて流麗かつ明晰であり、これは著者の並々ならぬ言語的センスと文学的感性を証すものである。また、外国語大学の大学院生にふさわしく、

テキスト解釈の要所にパンヴェニストの人称論やヴァインリヒの時制論が参照され、適切かつ効果的に取り入れられてもいる。

ただ、公開審査会では以上のような美質への讃辞のみが寄せられたわけではなく、陶山氏をすでに独立したフランス文学研究者と認めただけで、いくつかの疑問・批判・要望もまた寄せられた。その主要なものを挙げればつぎのようになる。

- ・ 四章のうち、もっとも優れた完璧な章は第一章だが、第三章には論理的な関係に不明瞭さが認められ、第四章には論旨展開の点で緩みが見られる。また全四章のあいだの相互的連関が必ずしも論理的かつ整合性をもって明示されていないため、論文を読み進めるうえで論者の意図を忖度せざるをえないところがある。
- ・ 上記の難点に関連することだが、たしかに時間をかけ、多くの文献を渉猟したうえで描かれた論文ではあるものの、せつかく様々な論点・着想を数多く提示しながらも、それらの論点・着想が主題的かつ問題別に整理されないまま、ただ並置されているだけの印象をあたえ、必要かつ十分に展開されきっていないことが惜しまれる。
- ・ 著者は研究対象を限定しすぎたことを反省しているが、問題はそうではなく、論述があまりに多方面に拡張するがゆえに論文としての統一性が不明瞭になるのであり、今後はすでに探し当てた豊かな主題系・問題系をもっと絞り込み、たとえば視線の無関係性と距離化の問題、距離化の時間的な次元と空間的な次元との問題、視覚と触覚の関係と距離など、それらの関連、連関をつきつめて考察すれば、さらに新たな飛躍が期待できるのではないか。

以上のように、この度の公開審査ではきわめて活発な議論がなされたわけであるが、上記の評価すべき点および不備な点につき、学位申請者から必要な応答・説明を受け、その後審査委員会が慎重な審議をおこなった結果、本研究科におけるフランス文学では初のこの学位論文を今後の規範たりうるものと評価し、陶山氏に博士（学術）の学位を授与することを全員一致で評決した。